身心脱落（大悟）の章

われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭々物々を、時々なりと覷見すべし。物々の相礙せざるは、時々の相礙せざるがごとし。このゆへに同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくのごとし。われを排列してわれこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし

身心脱落章は有時巻全体の眼目である。巻頭の蓋時の章は、主観の自己と客観の尽宇宙と存在物の一切が蓋時であることの説明であった。次の、仏の時間と凡夫の時間章は、凡夫の一面的な時間の進行の時間観にたいし、仏の時間の真実相の世界へ開眼をうながすための開示であった。

そして、この身心脱落章は身心脱落の大悟の体験によって、自己の身心全体が蓋時その物であることを明らかにする、重要な文意がふくんでいる。そのため、各注解書・解説書、の論議が分かれる章でもある。

「われを排列しおきて尽界とせり」

われとは、自己全体のことである。排列とは、順序よく並べる、配列と同意。『御抄』は「排列し置と云は、物をあまた取置たるやうには非ず。如文、唯我が尽界なる所を、排列とは云なり」と述べている。われを排列しおきて、尽界とせりとは、脱落した仏が当に観る、蓋時の自己全体のことである。

そして、尽界のわれには二つの見方が存在する。一つは、蓋時の時間論である。『私記』(蔵海)「我とは時なり～中略～自己の時とは時の外餘物なきをいふ、時の独立なり」の、私のような蓋時の立場、もう一つは、面山師『聞解』「尽界がわれ我れの外に尽十方界無し」の、空間、存在論の考えである。

『聞解』は、挙体全真の尽十方世界の自己であり、不滅の心源から随縁によって、能発された自己の全体が、尽宇宙（尽現）であると観ずる。この考え方を主張するのが、天桂師の『弁註』「我れを排列しおきて尽界とせりとは、彼長沙所謂尽十方世界是沙門眼、尽十方世界沙門全身云々」と明らかにする、

このように、「われを排列しおきて尽界とせり」の、解釈は各師によって異なる。蓋時の自己と、尽現の自己で注解するのかでは、道元禅、眼蔵全巻、有時全体の理解に重要な影響をおよぼすのである。

[この尽界の頭々物々を、時々なりと覷見すべし。物々の相礙せざるは、時々の相礙せざるがごとし」

前文は、蓋時の自己である主観の観点に説明の中心があり、本文は、主観の自己が当に観るところの客観世界の真実相を明かされる。尽界とは、十方(三次元、東西南北前後左右)のことで、全宇宙世界を意味する。頭々物々とは存在物のことであり、森羅万象である。無情の無機質物も、有情の生命がやどる存在も、一切が蓋時であり、各自、各個も、蓋時である。覷見とは、伺え見ること。仏から当に観るときは、全宇宙に存在する、森羅万象は洩れなく、蓋時が円転・転円する、刹那生滅が林立現成と理解すべきである。

「物々の相礙せざるは時々の相礙せざるがごとし」

相礙とは、お互いに障害対立の関係でないこと。その反対が罣礙である。物々とは、一物、一個、一輪、のことで、一つの物質の存在全体が法住位で各自が独立し、時空が交叉対立しないで、各々が自己の時空世界を究尽しているのが、真実のすがたである。

ようするに、「いつ」（時間）・「どこで」（場所）・「だれが」（自己、他己）・「なぜ」（存在理由）・「どのように」（行為）の、五つの各々が蔵身統一されて、自己の全宇宙の時空世界を構成されている意味である。各自の存在物は、即位置・即今・即時の移動がない。各自が住法位なのである。物々の各自が、相礙せざるであり、時々の相礙ぜざるがごとし。なぜなら、各蓋時であり、空間論では尽現である。

各自各個が前後際断した、住法位の唯一絶対の自己全体である。住法位とは、自己の身心全体が、尽過去時から尽未来際まで、全時間空間が他物との交叉交流のない、一点上に集約され、独立独歩の住位に、蓋時が法起しているのである。

私が、即今即時、此処に、生きつつある、あなたが（花、昆虫、小石、妻、木、等々）、そこに、生きつつある、刹那時全起・刹那時全滅が、一瞬起・一瞬滅する、蓋時が私、蓋時が花である。花はたしかに、自己の眼前に開花している存在であるけれども、蔵身円融し、花は花で統一現成している。六W一Hの、いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのように、と、尽実相・住法位・正当恁麼時・尽十方世界自己の全身に、蔵身し円融しているのだ。

蓋時とは、永遠の仏の現成する時間のことである。一瞬の起時が蓋時であり、一瞬の滅時の蓋時である。一刹那時の生滅時間は、前の未来、後の過去の両際が際断された、刹那時全体が永遠時の起滅なのだ。

そして、正当恁麼時とは、当に一刹那時の起時全体が東西南北左右前後上下・尽過去尽未来の、無涯まで、自己の宇宙で尽くし極められている。

花は花の蓋時、自己は自己の蓋時、仏は仏の蓋時、薬山は薬山の蓋時、青原は青原の蓋時、黄檗は黄檗の蓋時である。花は花の時系で尽くし、自己は自己の時系で尽くされている。尽十方界を蓋時しているのだ。

凡夫の視点にたてば、ＡもＢもＣも、自己の知覚認識体験する、世界と同じ時空世界

内で生活しているとおもう。そうではなく、真実は各々が、独立独歩の時空世界で現成しているのだ。A。B。C。自己。花の、各自の時間軸は交叉しないのである。そのことを、時時の相礙せざるがごとしである。

「このゆへに同時発心あり、同心発時なり、および修行成道もかくのごとし。われを排列してわれこれをみるなり。自己の時なる道理それかくのごとし」

なぜ、私が本章を「身心脱落」章と名付けた理由はこの文意にある。道元が師如浄下で身心脱落の大悟の体験をした。その時の自内証の内容が同時発心同心発時であると推察するからだ。

ここは、有時巻の一つの山になる文である。前文の「尽界の頭々物々時々なり～時々相礙せざるがごとし」までは、存在物と自己と住法位の独立性の説明であった。

本文は、身心脱落（大悟の体験）→成道（大地有情無情同時成道）→解脱（非思量、仏の境地）の体験の内容が説かれる。垂直正中線脱落が中心テーマである。

「われを排列しおきて～時々相礙せざるがごとし」までが、自己と宇宙との即一が明らかにされ、「同時発心同心発時」は、脱落→悟り体験→仏の正法眼の世界へと、宇宙観の大転換の説明に移行する。花開いて世界起のことである。同時発心同心発時とは、蓋時の自己が、蓋時として、華開し現成する意味である。其の時、世界起、発時、発心、するのだ。

禅師は眼蔵第五十七『遍参』巻でこのように説かれている。「仏祖の大道は、究竟参徹なり。足下無去なり。足下雲生なり。かくのごとくなりといへども、花開世界起なり、吾常於此切なり」仏々祖々の究極の体験は参徹であり、花開世界起であると述べている。

参徹とは身心脱落の体験のことである。一般的に、遍参の意味は修行僧が師を求めて行雲流水することである。禅師の云う遍参するとは、自己が自己に参ずることであり、仏が仏にあうことであり、見仏することなのだ。

自己が自己に参徹するとは、花開世界の時節である。参徹と脱落は同意。『聞書』「足下無去、雲生の意を北往南来（北に往き南が来る）」ではなく、即下のことであり、尽十方界の自己の意味である。身心脱落する時節には、花開いて世界が起すると説述する。「一花は世界起となり、一花開と云心は、たゝ世間に春ほころふる花をいはいす解脱する所を今花開と云う」と、花開世界起の体験が、世界崩壊の解脱（脱落）であることを開示する。

このように、華開世界起の体験は「自己が尽宇宙」、発時とは「蓋時」、発心とは「尽現、一心」が同時に通落することである。内証体験を、『聞書』「同時発心と云は百人千人の人が同時に発心せむするにてはなし、時が発する、同心発時とも云へし、心と時と二ををきて云へきにあらさるゆへに、同時発尽界なるへし」と述べている。

同時発心とは、脱落・解脱する意味。本来の姿である、ありのままの私に帰すること

である。そのことを、『聞書』は、百、千人が同時に悟ることではなく、蓋時が解脱し、自己が時として発心する意である。このことを、『聞書』は同時発尽界とよんでいる。発尽界も世界起も同じ意味である。同時は、時間的観点の蓋時のこと、同心は空間的視点の尽現のことである。同諦で時とよび有と説く。ここまでが、解脱時の体験内容であり、次が解脱した境地である。

「および修行成道もかくのごとし、われを排列してわれこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし」

　われを排列とは、自己と尽宇宙の世界崩壊し貫通した自己の全体相のことで、当に仏から観た、真実の自己の姿は、蓋時であり、尽現であり、ありのままのわたしの真実相なのである。われこれをみるなりである。自己が自己をみることであり、自己が本来のわれに帰する。われとは時なりであり、自己の時なる道理それかくのごとしの教意である。